

中村 文哉 NAKAMURA Bunya



研究分野：社会学、人間論

キーワード：人間行為とその主観的意味構成、疎外と受苦、
価値逆転

研究トピックス：

現象学的社会学、現象学的人間論、沖縄研究、 ハンセン病問題研究

研究の要旨：

ヴァルネラビリティ(弱さ)を抱え込んだ人間存在は、「生きられる時空間」を、如何にして再構成することができるのか。この問題を、当該行為者の〈主観的な意味の世界〉の構造および行為の主観的意味構成との連関 relevance を追いながら考察するのが、現象学的行為論ないし現象学的人間論の主題です。

具体的には、「ハンセン病罹患による疎外と受苦をどの様に生き、それらと折り合い、新しい生き方を構成していくのか／いけないのか」を考えることを通して、人間行為および主観的な意味世界がもつ主観的 intersubjective 意味現象・相互行為の可能性／限界を描き出すことが、本研究の意図するところです。

上記に引きつけて、健康福祉学のことについて、みてみましょう。

健康福祉に関する現象は、生理的・化学的な対象を除けば、たいていは主観的な人間行為のあり様を基点とした意味現象ないし社会現象として、捉え返すことができます。健康福祉学研究科で学ぼうとしている多くの方々には、自分の専門領域の中で、自身の研究テーマを考えるのが殆どであろうとおもわれます。**本研究の現象学的・社会学的視座は、敢えて、その専門領域の外側に出て、個々の健康福祉学的現象を、相対的かつ自己反省的に、捉えなおす営みということになりましょう。**普段は、自らの専門領域を絶対視してしまいがちですが、それをずらして捉え返すパースペクティブは、自己省察的な観方の世界へと、差し向けられます。個々の専門領域の外側には、内側からは捉えることのできない局面が拡がっており、そこに視点をおくことにより、実はより内側の局面がより視えてくるものが、しばしばあります。外側へと〈学びの旅〉をする時間と経験は、これからのキャリアにとって、貴重なものとなる場合があります。

主な関連業績：

中村文哉(2014)「沖縄ハンセン病患者の排除と移動——療養所なき時代における沖縄のハンセン病問題の位相」谷富夫・野入直美・安藤由美編『持続と変容の沖縄社会』第9章

中村文哉(2013)「記憶の身体性と世界体験の自己所与性——〈記憶の社会理論の三つの問題系〉」『社会分析』40号,日本社会分析学会

[教員紹介へのリンク](#)

[教員データベースへのリンク](#)